

妖怪マツカサキノコモドキはでんぐり返る！

萩本 宏（菌楽者）

私は、比叡山の西南麓、修学院離宮の近くに住んでいます。昔は東に数百mも行けばアカマツ山で、晩春から初夏にかけてハルゼミがジィジィと鳴き、秋にはマツタケが沢山採れました。京都の山々は平安の昔から里山として燃料用の柴や肥料用の落ち葉が何百年にも亘って採集され続けてきたために、禿山同然でした。その禿山は、明治の世になって伐採が禁じられてアカマツ林になり、昭和初期にはマツタケがよく生えるようになりました（本誌 No. 28、2012）。

ところが、1950年代中頃から高度経済成長が始まり、市域が郊外に急激に広がり、里人は農民から俸給生活者に変身し、家々に都市ガスやプロパンガスが普及したことで、里人は柴刈りをしなくなりました。すると、マツタケは1960年代半ばから急激に姿を消してしまいました。これでは松茸狩りの客を呼べなくなってしまうので、山の持主は学生アルバイトを雇って早晩にマツタケを植えさせました。マツタケを見馴れていない学生は、薄明のもとでマツタケの上下が分からず、逆さまに植えてしまうことがありました。逆さまマツタケに気付いたお客を想像すると可笑しくなります。

他方、私は、真偽を確認していませんが、ヴィクトリア朝時代のイギリスでは、スッポントケ（*Phallus impudicus* L. : Pers.）は、その学名の通り、卑猥なものとされ、図鑑でさえ逆さまに描かないと出版できなかったとか。逆さまであればよいというのも変な話ですが、日本に逆さまマツタケがあれば、西洋には逆さスッポントケがあったとは流石にphallusの隠喩の東西の両巨頭のお揃いで全く畏れ入りました。

見る人の心の営みをキノコの所為にするphallus談義はさておき、傘を高く持ち上げて胞子を少しでも遠くに飛ばそうと上に向かって成長することに鋭意努力しているはずのキノコが下に向かって力強く成長する姿を想像することができますか。今回は、この珍妙な現象を紹介させていただきます。なお、「キノコ」という言葉や個々のキノコの和名は、菌糸と子実体の両方を総括的に指す言葉のほずですが、この寄稿文では特に断らない限り子実体を意味します。

実は、逆さキノコが笑い話ではなく実在するのです。しかも、そのキノコは、妖怪キノコとして私の菌楽の相手をしてきているマツカサキノコモドキ [*Strobilurus stephanocystis* (Hora) Sing.] に観られるのです。この可愛いキノコの妖怪振りの一端は、本誌のNo. 27号（2011）で紹介させていただきましたが、逆さまマツカサキノコモドキに至っては、他のキノコの容易に真似ることのできないH難度の振る舞いです。松毬種鱗から発生した幼菌が隣の松毬を乗り越えて下に向かって成長してゆく姿は、なんとも優雅で、可愛く、しかも妖しいものです（写真1）。



写真1 隣の松毬を乗り越えて下向きに成長するマツカサキノコモドキ

「マツカサキノコモドキは、自然界ではちゃんと傘を上にして生えているではないか。どこが逆さまか」と反論されそうですが、確かに自然界では逆さまに生えているマツカサキノコモドキにはお目にかかれませんか。いくらなんでも逆さまのままでいては胞子を飛ばすことができません。そこで、マツカサキノコモドキは、通常はでんぐり返りをしてまともな姿で立ち上がるのです。しかし、ちょっとした手を加えると傘を上向けに開いた逆さマツカサキノコモドキができます（写真2）。

人間にも生涯で延 2800 回ほどものでんぐり返りをした有名な女優さんがおられるではありませんか。でんぐり返りは、この女優さ



写真2 でんぐり返りしてヒダを上に向けて開傘した逆さマツカサキノコモドキ。他の3個のキノコはでんぐり返りに成功し、正常に傘を開いた。

んが女優として生きてゆくために必要な演技であったように、マツカサキノコモドキにとっても子孫繁栄のためには欠かせない行為です。このキノコは、でんぐり返らないと大物になれないのです。マツカサキノコモドキは、いずれ、かの女優さんの国民栄誉賞受賞に匹敵する蕈民栄誉賞を貰うことでしょう。

このでんぐり返り現象の発見の端緒は、今から 57 年余りもの昔、1955 年の秋に遡ります。私は、大学3回生でしたが、農林生物学科 11 名の学生のための部屋の目の前にあった理学部附属植物園を昼の休憩時間によく散策しました。晩秋の或る日、いつものように植物園を散歩していてアカマツ樹下の落下松毬にキノコが生えているのを見つけました。驚いたのは無論ですが、これは良い研究課題だと嬉しくなりました。

たまたま、その時の植物生理学実習の担当教官が濱田稔先生（1910～1981）〔菌根学者、マツタケ学者、関西菌類談話会創設者、元日本菌学会会長：小川眞著『マツタケの話』（1984）に詳細な記述がある〕だったので、先生にお願いして川村清一著『原色日本菌類図説』（大地書院、1929）をお借りし、マツカサツエタケ〔*Collybia conigena* (Pers.) Bres.〕と容易に同定することができました（写真3）。

本誌 No. 27（2011）や関西菌類談話会報の「松毬に生えるキノコの話」No. 26（2006）と

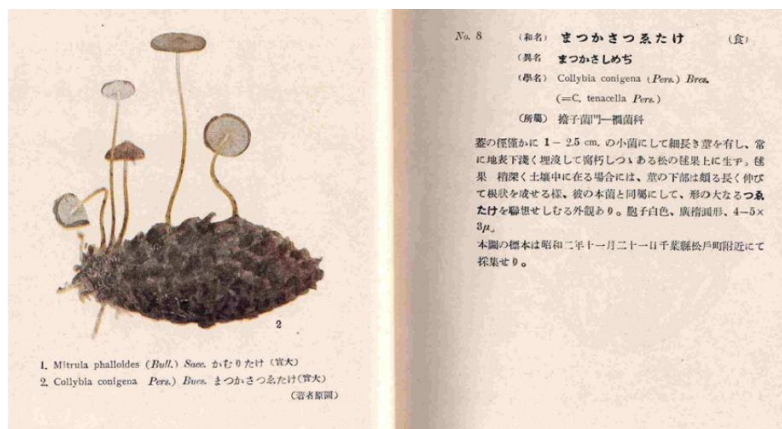


写真3

川村清一著『原色日本菌類図説』（大地書院 1929）のマツカサツエタケの図とその説明文。この図では地上の柄とによる柄の区別は判然としない。

「本郷次雄先生を偲ぶ—マツカサツエタケの教訓—」No. 27 (2009) では川村清一著『原色日本菌類図鑑』第4巻(1954)としています。が、まず『原色日本菌類図説』をお借りして、しばらくして発刊されて間もない『原色日本菌類図鑑』をお借りしたように思いますのでお詫びして訂正させていただきます。

私は、このキノコが松毬に生えていることから松毬にはこの菌の成長に必須の物質があることを予想し、それを抽出、同定したいと思いました。併せて、地中ををよるよるにやくにや伸びる柄と地上部で垂直に伸びる柄には違いがあるように思えて、柄の屈性を調べてみたいと思いました。地中のよる柄は、最終的には地上に達するものの、よるよるして正の光屈性や負の重力屈性で説明するのは難しいように思ったからです。

川村清一氏がいうところのマツカサツエタケは、地上で垂直に伸びる柄とよる柄の区別が判然としないだけでなく、マツカサツエタケそのものが、今はこの世に存在しません。が、私が関心を寄せたマツカサツエタケは間違いなくマツカサキノコモドキです。

私は、濱田先生から手解きを受けて濱田氏マツタケ用培地のブドウ糖を蔗糖に代えたものを基本培地にして、培地組成を様々に変えて培養しました。当時は研究室には冷蔵庫がなかったので、寒くなるまで待ちましたが、子実体は出ませんでした。更に、子実体が出ない培地に松毬の抽出物を加えても駄目でした。マツカサキノコモドキの研究(の真似事)は、英語で卒論にまとめはしたものの無残な失敗でした。大学院では別の課題に取り組みましたので、このキノコとはこれっきりの邂逅でした。

大学を去って38年後、2000年6月末に勤めを辞したのを機に自宅でできる研究課題を探しました。昭和天皇がヒドロ虫類をご研究の課題に選ばれた際の真似ではないのですが、誰も相手にしそうにない生物で、他人、特に

若い研究者の邪魔をせず、併せて、この点では俗人の私は天皇陛下とは違いますが、他人からも邪魔されないという基準で探しました。若い頃に飯の種にしていた雑草学分野での課題も併せて探しましたが、卒論に対する想いもあって学生時代まで遡って松毬に生える3種類のキノコ、即ち、マツカサキノコモドキ、ニセマツカサシメジ、マツカサタケを相手にすることを思い立ちました(関西菌談話会報No. 26 及びNo. 27)。

そして、2001年11月4日に、この懐かしいがほろ苦い思い出のキノコに京都御苑で46年振りに再会し、生育状況の観察を始めました。このキノコによる柄は、46年前に観たように、なんとも説明のつかない成長振りで地表にまで昇ってきていました。このキノコは、前記の川村清一先生の2冊の図鑑や今関六也・本郷次雄先生の『原色日本菌類図鑑』(1957)では真っ直ぐではないにしても、すべて上に向かって成長しているように描かれていますが、私が観察したものの中には下に向かって成長するものもありました。特に、地中に部分的に埋まった松毬の地際から発生した子実体は、そのまま上に成長するものと下に向かうものがありました(写真4)。

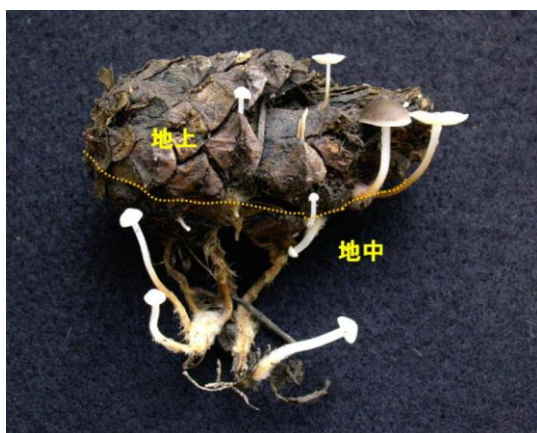


写真4 地中で発生して地中柄を長く伸ばしているマツカサキノコモドキと、地上で発生してよる柄が殆ど見られないマツカサキノコモドキ(よる柄は松毬の中にある)。

マツカサキノコモドキについては、現在、様々なお遊び実験をしています。そのうちの一つに純粋培養があります（本誌 No. 27）。私は、まず松毬を基質にしてこのキノコを培養することを試みました。培地は、瓶詰用のガラス瓶に松毬の固定と乾燥防止を目的に十分に吸水させた松毬の破砕片を入れ、その中に松毬を少し埋まるように置き、2003 年 12 月 22 日に寒天培養した菌糸を移植しました。他ならぬ松毬が餌なのだから簡単に生えるだろうと思いましたが、容易に生えず、諦めかけた2年後の2005 年 11 月にやっと、それも松毬からではなく、破砕片から生えました（関西菌談話会報 No. 26）。

その後、培養容器をA社のジャムの空瓶に替え、松毬の固定と水分保持をより確実に行うために松毬破砕片をバーミキュライトに替えました。前回の松毬の破砕片を用いた時には分からず、この実験で明らかになった事ですが、その生えたキノコたるや松毬から生えてバーミキュライトの中を瓶の底まで下降し、Uターンして上向きに成長し、バーミキュライト層から出て垂直に立ち上がり、傘を開きました（写真5）。



写真5 純粋培養で発生したマツカサキノコモドキも地中に潜り、Uターンして地上に現われた。

マツカサキノコモドキは、通常は松毬の土壤に埋もれた部分や地際から発生します。そこで、松毬をプランターに並べて頃合いをみ

て松毬の上下を逆にして土壤接地面に発生したキノコの小さな子供（子実体原基）を上にしてしました。キノコは、これ幸いと真っ直ぐ上に成長すればよいのに松毬の球面に沿って下降しました。しかし、多くの場合、地面まで到達せずに（できずに？）Uターンして上向きに成長しました（写真6）。地際から発生していて地面までの距離が近いキノコは、松毬を上下逆転すると地面に潜ってからUターンして上に成長しました。



写真6 松毬の接地面に発生したマツカサキノコモドキは、松毬の上下を逆さまにして上に向けられると松毬表面に沿って地面を目指して下向きに成長し、地中に潜らずに（潜れずに？）でんぐり返った。

キノコが地面に向かって生え、あまつさえ地中に潜るようなことは、想像するのも難しい事ですが、マツカサキノコモドキでは間違いのない事実です。しかも、この現象は土壤と深い関係があるよう思えました。そこで、土壤のない場合には、下に向かって成長しないはずと考えて、土壤のない条件での栽培を試みました。そのために、細長いアスパラガスの瓶の中に松毬を吊りました。ところが予想に反して瓶の中の松毬に発生したマツカサキノコモドキは、見事に下に向かって成長しました（写真7の1）。

マツカサキノコモドキは、松毬の種鱗の隙間から発生してきます。従って、種鱗の開口部が下を向いていると、即ち、松毬が木にな

っている状態に吊るされれば、キノコは下向きに出てこざるを得ないので、その惰性でしばらくは下向きに成長するのではないかという疑念が生じます。この点は、吹春俊光先生からもご指摘を受けました。しかし、松毬を枝になっている時の状態と反対にして種鱗間隙を上に向けても、上に出たキノコは向きを変えて下に成長しました(写真7の2)。

松毬には、マツカサキノコモドキの他にもニセマツカサシメジやマツカサタケが発生することはよく知られていますが、私は、この3種類以外にも *Mycena* sp. や *Podostroma* sp. が発生することを観察しました(本誌No. 27)。更に、春から初秋の暖かい或は暑い時期に *Tubaria* sp. *Gerronema* sp.、*Collybia* sp.、

に向かいました。これらの例外的な事象の説明には困惑しました。しかし、例外こそは隠された真実の発露であると気を取り直して考えをめぐらせました。

或る日、ふとこのキノコは、湿気の高い方向を目指して成長しようとしているのではないかという気がしたのです。キノコの柄の成長は、重力や光に支配されることは昔から知られていますが、マツカサキノコモドキによる柄の成長は、湿気の高い方向に惹かれる、いわゆる湿度屈性(屈湿性)で説明できるのではないかと思ったのです。

このアスパラガス瓶の実験では、瓶の蓋に直径5mm程の穴をあけて釣り糸で松毬を吊りました。瓶の中の湿度は、瓶の中ほどに吊

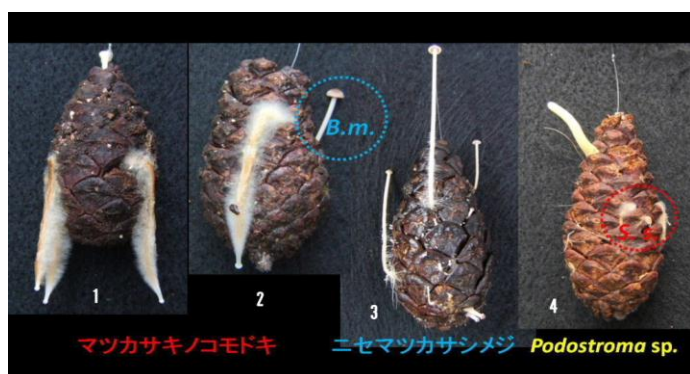


写真7 松毬の種鱗間隙を上に向けて懸垂した松毬から発生しても下向きに成長するマツカサキノコモドキ(1、2)と上向きに成長するニセマツカサシメジ(3)と *Podostroma* sp. (4)。マツカサキノコモドキと同じ松毬に発生したニセマツカサシメジ(*B.m.*)は上向きに成長し(2)、*Podostroma* sp. と同じ松毬に発生したマツカサキノコモドキ(*S.s.*)は下向きに成長した(4)。

ウマノケタケ、*Marasmius* sp.、サカズキホウライタケが発生することを明らかにしました(「京都御苑の松毬に生えるキノコの多彩な顔ぶれ—夏季に生えるキノコもある—」関西菌類談話会2012年度講演会要旨)。しかし、これらのキノコがUターン成長するような気配は全くありませんでした。更に、懸垂実験では、ニセマツカサシメジと *Podostroma* sp. は常に上向きに成長しました(写真7の3と4)。

ところが、マツカサキノコモドキでも、遅れて発生すると下降成長することなく、上に向かって成長するものがありました。また、表面がひどく濡れた松毬を懸垂すると発生したマツカサキノコモドキの多くは、上

るされた松毬の上と下では違うのではないかと考えました。しかし、松毬をセットしてから時間が経つと松毬周辺の湿度が均一化するので、湿度ナビが働かず、負の重力屈性で上に向かうのではないかと推察しました。また、松毬が著しく濡れている時でも、瓶内湿度の均一化が急速に起こって湿度ナビが効かなくなるのではないかと考えました。

それでは、瓶の中を下降したキノコは、何を契機に方向転換して上に向かうのでしょうか。若し、私がキノコだったら、ナビが効かなくなれば重力屈性によってもときた道を引き返します。即ち、前記の例外の現象の説明を適用して、このキノコは周辺の湿度の均一な場所に到達すると負の重力屈性でUターン

すると考えれば説明できる事に気がきました。これがマツカサキノコモドキのでんぐり返り現象の現時点での説明です。

マツカサキノコモドキが湿度の高い方向に成長するのであれば、このキノコの生える松毬の上の方の湿度を高くすれば、そちらに成長するはずですが、そこで、乾いたバーミキュライトを敷いた箱に松毬を並べてその上を湿らせたキッチンペーパーで覆いました。また、粗い目のプラスチック製の籠に松毬を並べて湿したキッチンペーパーで覆い、木陰に吊るしました。

マツカサキノコモドキは、バーミキュライトに潜行したり、籠の目を潜って下方に成長したりすることはありませんでした。しかし、

少し下向きに成長し、Uターンして上向きに成長するもののがかなり見られました(写真8)。この現象は、松毬を並べた間隔が狭かったために、その隙間の湿度が高くなり、マツカサキノコモドキは一旦下向きに成長しかけたものの程なく乾いたバーミキュライトのところに到達して上向き成長に転じたと考えたと説明がつきます。

それにしても、マツカサキノコモドキは何のために、このような成長をするのでしょうか。松毬に生えるキノコは、私が観察しただけでも10種類ほどありますが、このような成長パターンを示すのは、このキノコに限られていそうなのは何故でしょうか。このキノコ



写真8 マツカサキノコモドキは、松毬の上の空間の湿度の方が培土の湿度よりも高いと松毬の接地面から発生しても地中に潜らずに上向き成長した(左)。しかし、松毬の配置間隔が狭いとマツカサキノコモドキはその間隙でUターン成長した(右)。



写真9 地中に埋もれた1個の松毬から発生したマツカサキノコモドキの分散はよろ柄の横方向への成長と土壌によって支えられることによる(左)。従って、土壌を除けるとマツカサキノコモドキは倒れてしまう(右)。



写真10 地中に潜ったマツカサキノコモドキ（左）は、大きく成長したが、潜らなかったもの（右）は小さかった。

は、でんぐり返りをして何か良いことがあるのでしょうか。悩ましいところですが、悩まなければ悩ましいほど、解けた時は嬉しく、楽しいもので、まさに菌楽の醍醐味です。によろ柄を横に伸ばせば仲間から離れられるので、胞子をより広い範囲に効率的に飛ばせるのではないのでしょうか。それならなぜ土に潜り、その中を這うのでしょうか。それは、地上部を這って横に移動するだけでは、立つことができないからだと思います。このキノコは土に潜り、横に移動・分散してでんぐり返り、土を支えにして立つことで傘を大きく育て、大量の胞子を作って効率的に飛散させ、生存競争を有利に戦うのです（写真9、10）。

マツタケでも土による何がしかの支援なしに立っていられるとは思えません。地面に生えるキノコは、多少なりとも土に支えられていると思います。私は、図鑑でしか知りませんが、コブリビロードツエタケやブナノモリツエタケなどが土なしで立っていられるとは到底思えないのです。和名に「ツエタケ」の語を含むキノコは、柄が長く、杖状であることに由来するのでしょうか、本当はキノコが土を杖にしたり、土にもたれたりしているのですから「〇〇ツチツエタケ」とすべきではないのでしょうか。

土で支えられて立っているキノコは、沢山あるにしても、支えられるためにわざわざ土

に潜るように進化したのは、マツカサキノコモドキだけ、或は本家のマツカサキノコの2種類だけではないかと思います。一層の事、これらのキノコが潜ったまま地上に出ないキノコ、即ち地下生菌に進化すると面白いのですが・・・。

マツカサキノコモドキは、松毬が湿度の高い状態に置かれると、松毬の土を被らない部分からも発生してきますが、通常は小さなキノコになります（写真10の右）。しかし、人為的に多湿環境を保ち続けると、によろ柄が松毬の上を這って、キノコは土に潜らずに立ち上がり、通常の大さに成長します。この場合、によろ柄は、その絨毛状の菌糸で松毬にしっかりとしがみついて自ら基壇となってキノコを立ち上げるのです（写真11）。また、懸垂松毬からの発生の実験でキノコがUターンする際の上向き成長もによろ柄の絨毛が他のキノコの柄に付着したり、松毬に付着したりして立ち上がりました（写真12）。によろ柄はキノコの地上部を松毬から離す役割と起立させる役割をしていると解釈できます。



写真11 高湿度下で松毬の地表露出部から発生し、成長したマツカサキノコモドキは、引き続き高湿度下に置かれるとによろ柄が松毬上を這ってから上方向に大きく成長した（左）。によろ柄は絨毛状菌糸で松毬にしがみつきの、基壇となってマツカサキノコモドキを支えていた（右）。

私は、このによろ柄を取りあえず地中柄と呼んでいますが、なんとも得体の知れないものです。マツカサキノコモドキは、前記の川

村図鑑や今関・本郷図鑑などでは土壌のない状態で描かれています。成菌では地上部にある柄（仮に地上柄と称しています）と地中柄は、それぞれ地上と地中にあるので問題はありませんが、全体が地中にある幼菌の場合でも、更に種鱗間隙中にある原基の場合でさえ



写真 12 懸垂松毬から発生したマツカサキノコモドキは、Uターン後は絨毛状菌糸で松毬にしがみついて上向きに成長した。



写真 13 松毬の種鱗を剥がして露出させた極めて若いマツカサキノコモドキでも、地上柄と地中柄は分かれており、両者は子実体形成の極初期に分化するようである。

も、地上柄と地中柄が区別でき（写真 13）、前記の今関・本郷図鑑にもそのように描かれています。従って、幼菌が成長した暁には、幼菌時に地中にあった地上柄が地上でそのまま地上柄になり、幼菌時に地中にあった地中柄がそのまま地中柄になるのでしょうか、今後、正確に調べる心算です。

最後にマツカサキノコモドキのUターン成長が湿度に導かれるとすれば、このキノコがそのような成長パターンをとる条件下で実際の湿度がどのようになっているか直接測定して推察通りかどうか確認しなければなりません。このキノコの湿度に対する感度が高いと、精度の高い湿度計が必要になり、厄介な事です。しかし、何とかして湿度を実測して私の仮説を検証したいものです。仮説を痴蕈の夢で終わらせないように頑張りますので、皆様のご指導を宜しくお願い申し上げます。

なお、松雄君と茸子さんの珍問答をご参考までに付けておきます。

茸子：お久しぶりね。岐阜大（日本菌学会第56回大会、2012年）でお会いして以来だわ。研究の進み具合はどう。

松雄：君の先輩の珍説を聴いて調子がおかしくなったよ。「マツ科植物の毬果に発生するキノコの研究Ⅰ マツカサキノコモドキ子実体の成長に関する屈湿性成長と土壌依存屈地性起立の二つの仮説の提唱」なんてそれこそによる柄みみたいな題名だね。

茸子：先輩は、日本菌学会発足当初の会員よ。入会10年余りで退会して2009年に再入会したとか。マツカサキノコモドキだけでなくて本人もUターンね。

松雄：1955年に気になった現象をほぼ半世紀ぶりに研究して発表するなんて。当時は、菌学関係のお偉方が学会設立の相談をしておられたとか。恐るべき執念だね。

茸子：ロクな卒論が書けなかったからとか・・・。

松雄：松毬にキノコがによきと生えて元気よく湿った方向に向かい、湿度差を感知できなくなると上に向かうなんていう妖しげな珍説は、どのようにして考えついたのだろうか。松ぼっくり（本誌 No. 27）からの演繹による必然的帰結なのかな。いやはや菌楽よりも雑想楽だね。

茸子：メタファー三重奏の雑想楽はあなたの方じゃない。あらぬ妄想で一酸化窒素が発生し、cGMP が増えて調子が狂ったようね。PDE-5 の活性阻害がまだ続いているの？逆さスッポンタケが羨ましがるわよ。

松雄：それどういうこと？ 蒲魚さんの話は時々分らない・・・。

茸子：自分の事は自分で調べて。私は、学会の会場で先輩に仮説の発想について直接尋ねてみたわ。京都御苑に行った際には、松毬を拾い集めてマツカサキノコモドキの発生場所にせっせと撒いているのでキノコがお礼に秘儀を教えてくれたと神憑り的な返事だったわ。それからUターン現象は、自分がマツカサキノコモドキだったらどうするか考えたって。先輩はキノコの擬人化や自己の擬蕈化などでヒューリスティックな仮説を狙ったのかもね。高貴高齢者のやりそうなことだけだね。

松雄：土に潜るといのはラッカセイみただね。まさにもぐり学者の発想・・・。

茸子：私もラッカセイを連想したので尋ねてみたの。先輩も下降現象に気付いた時はラッカセイを連想したそうよ。しかし、ラッカセイの地潜りは正の重力屈性によるものだし、無論、でんぐり返ったりはしないからその類推は直ぐに放棄したって。

松雄：学会創立当時の会員の発表なんて枯木

も山の賑わいどころか、化石は山のヒストリーだね。発刊後間もない頃の日本菌学会報には先輩の寄稿文が3編、即ち「茸栽培家森本彦三郎氏の生涯と研究について」（3:144-147, 1962: 濱田稔との共著）、「帽菌類子実体の発育の生理」（4:103-110, 1963）、「On the growth of the fruit body of *Agaricus bisporus* (Lange) Sing.」（4:158-164, 1964）が載っているところをみると一寸キノコをかじったみたいだね。昔かじったキノコが50年後に遅発性幻想を惹き起こしたのかな。

茸子：当時は、菌学者は植物学会などで発表していたそうよ。「茸栽培家森本彦三郎氏の生涯と研究について」は、調査不足のために菌床栽培の始まりはエノキタケと記述してしまったが、実際はシイタケの誤りだって。菌床栽培と米糠・鋸屑培地による純粋培養種菌の榎木への接種法は、共に森本彦三郎氏が1927年にシイタケで発明し、その栽培法を1928年にエノキタケに応用したが、これらの発明物語は、戦前から歪曲、捏造、剽窃と魑魅魍魎が横行する世界だって。「森本彦三郎氏による菌床栽培法と純粋培養種菌の榎木接種法の始まり—それはエノキタケではなく、シイタケで始まった—」（関西菌類談話会50周年記念誌、2008）に文献を挙げて詳しく書いてあるわよ。多くのキノコ研究者は、未だに魑魅魍魎に取り付かれているからいずれキノコ学者の妖怪振りをこのシリーズで紹介するとか言っていたよ。

松雄：へーえ、キノコ学者の妖怪譚？ 妖怪達の祟りはないのかな。

茸子：先輩は分子系統分類が大勢を占める学界の趨勢の中でアナクロニズム的研究に精を出す妖怪、天邪鬼かもね。

京都洛北・修学院の菌楽舎にて